

2023年6月の総評：木下龍也

朝一番に教室へ

部屋いっぱい大きな薬指／羊夏生

「薬指」であることが読み解くヒントになりそうだ。主体は指輪をしているのかもしれない。一般的に左手の「薬指」にする指輪は婚約の意味を、右手の「薬指」にする指輪は恋人がいるという意味を持つ（らしい）。「朝一番」のだれもいない「教室」で、おそらく校則では禁じられている指輪をして、「薬指」で視界がいっぱいになってしまうほど間近で指輪を眺めている。きっと指輪が嬉しいのだろう。そのまま書けば、視界「いっぱい」となるはずなのだが、「部屋いっぱい」としたことで、主観が客観に漏れ出し、怪談のようにも、青春の1ページのようにも読める不思議な詩となった。

「あなたがいるから幸せ。」

「私も（幸せになりたい）。」／浅葱

最初の台詞をAさん、次の台詞をBさんと分ける。Bさんの（幸せになりたい）は、発話されていない内心であろう。発話された「私も。」だけを受け取ることでできるAさんは、Bさんも自分と同じく「あなたがいるから幸せ。」だと感じてくれているのだと安心するはずだ。が、Bさんは「あなたがいるから幸せ。」だと素直に愛情を表現してくれる存在がいてもなお、現状「幸せ」ではないのだ。Aさんにとって唯一救いがあるとすれば、Aさんはこのことを知る術がない、ということだろう。神様だけに読むことのできる脚本を垣間見てしまったような怖さと驚きがある。この詩を読んでしまった人間はきっと、「私も。」と言われても安心することができなくなる。

冷蔵庫 三連パックの納豆の

白の高さがわたしの残機／四方山水面

「残機」とは、ゲームのプレイヤーがあとどれだけミスをして許されるかを示す回数であるが（ググりました）、この歌のそれは、精神的にあとどれだけ持ちこたえられるか、という意味に近いのかもしれない。ゲームのようにわかりやすく表示してくれたらいいのだが、現実「残機」が表示されることはないため、自身を追い込みすぎたりしてしまう。精神的な「残機」が可視化されれば、もう少し生きやすくなるかもしれない。だから主体は「三連パックの納豆の白の高さ」にそれを託したのだろう。例えば、卵の個数では「残機」がやや多すぎて切迫感が伝わらない。生活に密着しており、食べれば健康になれるような「納豆」、しかも個数ではなくメーター的に「白の高さ」で捉えて見せたところにこの歌のうまみがある。他者の生活にも影響を及ぼす歌であると思う。きょうは「納豆」を買い足しておこう。

何枚も重ねたお皿を手にとって

純文学をあきらめている／まちりこ

昔、結婚式場でバイトをしていたことがある。長く働いている先輩ほど技術が向上し「何枚も重ねたお皿を手に持って」いた。新人バイトの目標となるその先輩の夢はお笑い芸人として売れることで、こんなことしてる場合じゃないんだけどね、とよく言っていた。だったらバイト辞めたらいいのに、と思っていたその頃の僕にはわからなかったが、夢を追うだけでは生活ができないし、生活をするだけでは夢が追えない。「純文学」を志すのであれば、それに没頭するための生活費も時間も必要になるが、生活費を用意するためには時間を割いて働かなければならないため「純文学」に没頭することができない、というジレンマ。夢には余計な技術ばかり身に付いていく現実。生活のために夢から離れてしまった人には刺さって抜けなくなる1首。

十円の価値だけドライヤーをして
あとは夜風に乾かす鱗／松下誠一

銭湯などでは入浴料とは別に「ドライヤー」の使用料がかかる。「十円」なら「十円」ぶん、二十円なら二十円ぶん、「ドライヤー」を使うことができる。あえてぶんと書いたのは、なかなか「十円の価値だけドライヤーを」するというふうには言わないだろうと思ったからだ。意味合いとしては同じなのだが、言葉の選択として「価値」は自然ではないような気がする。冒頭からそんな不思議な感覚があるのだが、結句に「鱗」というタネ明かしがある。この位置に「鱗」があることによって、想像していた光景が幻想的なものへと切り替わる。主体は魚類や爬虫類なのだ。半魚人や人魚かもしれない。だとすれば「十円の価値だけ」という不思議な言い方も理解できる。人間の生活に馴染みつつある、人間ではない者の言葉遣いなのかもしれない。手品のような歌だった。

均等な薄さで
スライスしてください
それがマイホームに至ります／からすまあ

ジョージ・オーウェルの『1984年』的な世界観で言えば、管理者にとって、労働者に何かを考えさせるということ自体が危険である。労働者も、労働における目標も、労働の先にある夢も、すべてが均一化されていなければならない。例外はシステムに亀裂をつくるからだ。工夫の必要はない。「均等な薄さでスライス」すればそれでよい。それぞれに夢を持つ必要はない。「マイホーム」購入に向けて労働をせよ。みな同じであれ。あらゆる可能性をマスキングし、単純な1本の矢印だけを見せて、搾取し続ける。管理社会の恐ろしさがコミカルに表現されている1首だと思う。

先生の舌って薄かったんですね
式に呼んだら来てくれますか／青野陽

他人の「舌」を見る機会はありません。たとえ見たとしても、わかるのは大／小、長／短、色、くらいで厚い／薄いはいかなる方法で接触しなければわからない。他人の「舌」を指で持つ機会も少ないはずなので、この歌はおそらくキスをした後のシーンだ。キスであれば相手の「舌」についての厚い／薄いを、自分の「舌」を基準に判断できる。「先生」と呼ばれているので、医者、政治家、作家、なども考えられるが、わかりやすくするためにふたりは、教師と生徒という関係性である（かつてそうであった）と見なす。「薄かったんですね」から読み取れるのは、意外である、という感想だ。そして、そう思うためには、キスをする以前から「先生の舌」を想像をしている必要があり、その想像をするということは、主体は「先生」に好意を寄せている（いた）のではないかと思う。その好意が「先生」に届き、ふたりはキスをした。してみたら「先生の舌」は意外に「薄かった」というのが上句だ。説明が回りくどいが、下句の「式」は、おそらく結婚「式」であると思われる。主体には結婚する相手がいて、だから、好意を寄せている（いた）「先生」とキスをしたにもかかわらず、喜びではなく「薄かったんですね」という感想しか出てこない。さらにキスをしておいて、自身の結婚「式」に「来てくれますか」と訊いているのだ。きっと「先生」は動揺するだろう。「先生」と呼んでおきながら恋の駆け引きにおいては主体の方が上だ。

なみだなんて浴びたら

来世ほたるだよ／みのり

現世で悪いことをすると「来世」で苦しむことになる、という話であれば我々人間にも根付いている考え方なのかもしれないが、現世で「なみだ」を「浴び」と「来世」で「ほたる」になるという話からは因果を見いだすことが難しい。なぜそうなるのか、ということがわからない。けれど、主体はそうなることを知っているかのように語りかけている。主体は神様のような存在なのだろうか。初読では亡くなってしまったペットを飼い主が抱いているシーンを想像したが、もしかしたら生まれたばかりのペットに神様が語りかけているシーンなのかもしれない。先に亡くなったりして飼い主を悲しませた場合には、来世で「ほたる」にするよ、というように。「ほたる」になるよ、ではなく「ほたる」にするよ、という力を持つ者の言葉であるならば、この確信めいた「だよ」にも納得がいく。「来世」が「ほたる」というのは決して罰ではないだろう。「ほたる」はひかり、人間はそれを眺め、前世のような悲しみの「なみだ」はそこに流れないのだから。

それぞれの罪それぞれの渦

かたつむり／田崎森太

「かたつむり」の殻と体は別物ではなく、殻のなかに内臓があり、殻が大きく破損したり、無理に取ったりすると死んでしまうとのこと（[Wikipedia](#) を読みました）。「かたつむり」と殻は切り離せないものなのだ。人間の犯す「罪」もそうかもしれない。犯してしまえば、刑期を終えたとしても、その「罪」からは逃れられない。切り離したくても切り離せないものになり、後悔や反省というかたちで頭のなかをぐるぐるとまわり続ける。殻ではなく「渦」と書かれてあるのは、殻を破る

というようなポジティブなイメージを排し、一生つきまとい、背負っていくものというイメージをより強くするためだろう。そして、コベソマイマイと名付けることはできても「渦」の細部は違う。殺人と名付けることはできても「罪」の細部は違う。だから「それぞれ」なのだ。もし「かたつむり」というお題が出たら、自分はこちらまで内容を、しかもこの文字数だけで、書ける気がしない。

本当の家に微熱の人がいる／合川秋穂

「家」は「家」であり「本当」と（嘘）に分かれるものではなかったはずなのに、「本当の家」と書かれると（嘘の家）という考え方が頭のなかで自然にたちあがる。「家」が「本当」と（嘘）に分けられる状況とは何なのだろう。例えば、主体が単身赴任をしているようなケースが考えられる。ある一定の期間、ある一室を借りて住んでおり、それとは別に家族の住む自宅があるような場合だ。けれどこの場合、家族のうちで「微熱」を持つ誰かを「人」と呼ぶだろうか。「人」と呼ぶのは、夫や妻や子や恋人という関係性ではないから、ではないだろうか。公にはできない関係性の「人」が頭をよぎるが、推測できるのはここまでで「本当の」ところは主体にしかわからない。ただ、その「人がいる」「家」が主体にとっては「本当の家」なのだ。

以上です。長くなってすみません。来月も楽しみにしています。

木下龍也